

現代宗教運動と若者の心

東京大学教授 島 蘭 進

1991年4月15日、東京の練馬文化会館でオウム真理教のダンス・オペレッタ「死と転生——麻原彰晃のサマディの世界」を見た。死から生まれ変わりまでの49日、すなわちバルドー（中有）の期間に死者が体験することを信徒がダンサーとなって演じたものである。高度の技能をもつダンスの専門家が信徒のなかにおり、その振り付けや演出があったものと思われ、そこそこの出来ばえと私には思われた。ダンサーたちの若々しい引き締まったからだがりズミカルに躍動するさまはまぶしかった。おそらくかなりの量の稽古を重ねたものだったのだろう。意気込みも並々ならぬものと感じられた。

内容の上でとくに印象深かったのは、そこで描かれている異世界の人と神仏が織りなす情景の暗さだった（今、『マハーヤーナ』誌、42号特別版、1991年5月を参照しながら記憶をたどっている）。なるほど明るい場面もある。智慧の神々、平和の神々、救いの仏らの柔和な表情、彼らによって救いへと導かれる人々の喜び、麻原と弟子に扮したダンサーが人々の救済を願って瞑想する場面など。しかし、もっと強く私の印象に残っているのは、苦しみや争いの情景である。恐怖の神々が暴力をほしいままにする場面。暴力と争いと苦しみに終始する衆生の姿を描く天界、餓鬼界、動物界の場面。閻魔大王により悪業を数えたてられ、さらには地獄をさまよい苦悶する主人公を描く場面。このような重苦しい情景が次々と演じられ、それが救いの喜びと対照されていた。

それは著名な密教典籍『チベットの死者の書』をよりどころとし、麻原の体験に色づけられて描き出されたものとされていた。仏教（チベット密教）の教えに従ってバルドーの世界を描いたというわけだが、私にはそこに現代の若者の心象風景が投影されているように思えてならなかった。麻原自身は『マハーヤーナ』誌特別版の劈頭に、このダンスを意義づける小文を載せ、次のように書き出している。「人は必ず死ななければならない。そして、その死後の世界は、まさに恐怖と苦しみで満ちあふれている。」このような恐怖と苦しみを正面から見据える

ことが、「カルマの理法に精通する」ことなのだ。ダンスに登場する麻原も『マハーヤーナ』誌に写真で登場する麻原もまことに柔和な表情である。しかし、その心の奥には荒々しい情念と苦悩がうずまいており、しまい込まれているかのようだ。

その荒々しい情念と苦悩のうずまく心の中核には、たぶん清らかでイノセントな「自己」がいるはずだ。ダンス・オペレッタでときどき表現されるナイーブな喜び、転生の瞬間の子供らしい仕草やヒョコや子虫の姿、そして劇中の麻原に向き合った弟子達の従順な帰依の表情——それは信徒や共鳴者には清らかでイノセントな自己の象徴として、いとおしく受け止められたのではなかろうか。まことに素直なふるまいがそこここに現れる。それは作者である麻原の、また、振り付け師やダンサーたちの心にしまわれている大切な何かの表現ではなかっただろうか。「君たちのなかのうぶな子供達、それを隠すことなく大らかに表していいんだ」——こう麻原はいつているかのようだった。

うぶとも見えるイノセンスと露骨な悪の表現の対照。その極端さが引き込まれながらダンスオペレッタを見る私の心を落ち着かなくさせたのだと思う。若者の荒々しさとはそもそもこうした対照をはらむものなのだろう。また、一般に救いの宗教というものもしばしばこうした無垢と苦悶の対照に思いをこらすものなのだろう。しかし、ここではその表現があまりに無防備でナイーブなものと感じられる。若者が危ういことに不思議はない。だが、外見は熟して力強く、からだのすみずみにまで意識をゆきわたらせ、巧みに情報や記号をあやつる彼らの、内なる柔らかさ傷つきやすさはその落差が大きすぎる。

もし、この若者たちに大学の教室やそれに類する社会の表の場で出会ったら、彼らはどのような態度を示すだろうか。たぶん容易にこうした内面をさらけ出すことはないだろう。今いる環境で許されている表現様式を察知し、そこからはずれずにつつがなく切り抜けていくべく巧みな配慮をこらすことだろう。おたがい孤独に生き延びていこうとする人々がひしめきあう社会で、弱さ、素直さをあからさまに

見せることは禁物だ。仮面をかぶって大半の仕事やつきあいが過ぎていく。そのことにたぶん疲れているが、内にこもる思いを発散する機会が乏しい。消費文化に乗り、発散する機会をうまく作っているかに見える者たちを横目に見ると、それはいかにも軽佻浮薄と思われる。そんな若者の心に「悪」が、また「悲しみ」が降り積もるのだと思う。伝えられない情念と苦悩が、内なる悪、外なる悪として巨大なイメージに膨れ上がるのだ。

宗教はそうした「悪」の容器となりうるはずのものだ。かつてそうだった。仏教だけが人間の業の深さや耐え難い苦悩の重さを強調してきたわけではない。キリスト教や他の救いの宗教も悪に思いをこらし、それと何とか折り合いをつけていくやり方を示していた。悪しきものと無垢なるものに、けっして無防備とはいえない形で二つながら表現を与える方法がそこにはあった。部外者から見ると、宗教のなかでの情緒の発散は愚かしく見えたり、奇矯であったり、自己陶醉のように見えたりする。だが、長い時間をくぐり抜け、人間の心身における多くの経験を経て水路づけられている場合、それはすぐさま危うさにつながることはない。不器用には見えても、「道」を通して熟成するためのそれなりの方法をそこに見出すことができる。悪が道に織り込まれていく。そうすることで鍛えられた無垢が形成されていく。

だが、今どこへいけば、そのような「悪を受け止めてくれる容器」に出会うことができるだろうか。

既成宗教、新宗教のなかに大きな容れ物をもった指導者はいるかもしれない。心理療法家も有力な候補だ。また、ボディワークや技や道の世界の修練にそうした容れ物を見出す若者もいるだろう。だが、良き出会いはなかなか得にくい。情報化社会は良きものの情報が見えにくくなる社会なのかもしれない。そこへ宇宙大のドラマを繰り広げながら、悪に向き合い、悪に打ち勝つ道を示してくれると見える人物が、ふと現れたとしたらどうだろう。ほんのちょっとしたきっかけで十分だろう。若者がそこに引き寄せられるのは、当然ともいえないだろうか。

現代社会は深いところで情念を表現し、分かち合う場や交わりの空間をひどく狭めてしまった。消費主義的な文化は、親しい交わりや深い意味と結びつかない「発散」の機会を巧みに作る。手をかえ品をかえ、人は「発散」へと向かわされる。だが、積もる悪は除去されない。そのことによるダメージを若者はとくにこうむりがちだ。人間が本来的にもっている荒々しいもの、しまいこむのが困難なものを、若者はたくさん内に抱え込んでしまうことになるからだ。それは残酷なほどともいえるだろう。現代の宗教運動は、そうした若者の欲求に答える何ものかを与えようとしている。いつの時代もそうだが、宗教運動はそれが登場した社会に何かを訴えようとしている。「カルト」について語るとき、そのような訴えを感じ取り、現代社会の病理を改善する意志を持ち続けることはもちろん可能である。

夢七話

駒沢大学教授 佐々木 雄 二

夢にあらわれるものには意味のないものはない。

エーリッヒ・フロム

●この世も自分も消滅する夢

15、6年は経つだろうか、ずっと以前、恐い夢を見たことがある。

夢の中でふと気づくと、わたしは丸太で造られたそれほど大きくない質素な山小屋の中に、一人で、ただ立っていた。すぐ前には厚い板を組み合わせたテーブルと数脚の椅子があるだけで、装飾品などは

なく、人の気配は全く感じられなかった。小屋の中が、突如その明るさを増し始めた。明るさは次第に強くなり、無機的な連続音を発しながら光の密度を増し、音が大きくなるとともに光もますます強くなっていく。テーブルも椅子も光に遮られて見えなくなった。光はさらに強く濃くなっていき、「光の嵐」とでも言うしか表現しようのない強さで私を包んでいく。光には太陽のような赤い光だとか月に時たま見られるような蒼い光などといった色はなく、まさに純粋な光そのものであったが、しいて言えば